

潘 英豪

PAN Yinghao



あの時、不死鳥を見た

紙本着彩

あの時、不死鳥を見た

人はみな幼少の頃、「見立て」をして楽しんだのではないだろうか。例えば、雲がアイスクリームのように見えたり、かたむりに見えたりするようなことだ。私は、この「見立て」をする能力は、人間の想像力へと繋がっていると思う。私の研究テーマは錯覚を利用して面白い表現を探求することにある。

《あの時、不死鳥を見た》を描く際、インスピレーションの源泉は、瀬戸内海である。この地に旅に出たとき、ある植物が私の目を引いた。太陽に照らされた草木の輝くような緑色は、とても生き生きとして軽やかであった。そのような草木を見ていると、私は、動物たちや生き物のように目に映ることがある。この旅路においても、そのようなことが起こった。日差しに照らされることで強く浮かび上がった植物の輪郭線が、風景の中で不死鳥の形となった。私は、まるでその瞬間に不死鳥が飛び立つ姿を見たような気がして、その瞬間をカメラに捉えた。この美しい情景に出会えたのは、ほんの一瞬の出来事だったが、私は、感動と共に絵画に表現することにした。

不死鳥は、現実には存在していない。不死鳥の容貌は中国に伝わる物語の中で、孔雀に似ていると記されている。私は、孔雀に関する情報を収集した。孔雀の羽根は大きく分けると四色ほどの塊になる。それらの色調に合うように、植物の葉を孔雀の羽の色に置き換えた。不死鳥の輪郭線の内側には、植物を模した葉や花を不死鳥の羽根として描いた。例えば、画面右下にある赤い丸は、主観的かつ意識的にポピーとして描き、孔雀の尾羽の黒い丸に「見立て」している。私の画面では、ファンタジーとリアリティーの部分が織り混ざっている。

日常的に目にする情景も、想像力を働かせることで、ロマンチックな美しい情景になる。私は、そのような「見立て」をして世界を見ている。